

# 明治大学の教育

## PROFILE



大江 徹男  
OE Tetsuo

農学部教授・食料環境政策学科長

専門：農業経済学、フードシステム論

1961年 山形県生まれ

1986年 京都大学経済学部卒業

1995年 京都大学大学院経済学研究科博士後期課程退学 博士（経済学）

2005年 明治大学農学部准教授

2011年から現職

主な著書・論文

『アメリカ食肉産業と新世代農協』（日本経済評論社・2002年）

『燃料か食料か：バイオエタノールの真実』（共著・日本経済評論社、2008年）

所属学会

日本農業経済学会 日本フードシステム学会

## 農学部食料環境政策学科における 「4年一貫の少人数ゼミナール教育と 多様な実習教育」

明治大学農学部食料環境政策学科は、農学部の文系学科であるだけに、他の文系学部とは異なるいくつかの特徴を有している。食料環境政策学科では、「人間の生存課題を人間の行動の観点から考え、解決方法を探る」をテーマに、講義に加え、各種実習を用意し、基礎力に加えて応用力や実践力を養うことを重視している。そのため、4年間のカリキュラムの中で特に力を入れているのが「少人数教育と実習」で、講義と現場とを結び付ける教育を実践している。

講義では、最も基礎的で重要な「食料」と「環境」を巡る諸問題について、経済学、社会学、政策学、経営学、会計学、開発学などの社会科学の側面から総合的に学習することができる。講義に加えて実施しているのが、専任教員全員が担当

するゼミ形式の少人数授業で、全ての学年で実施している。つまり、学生は、同一キャンパスで専任教員と4年間ゼミで濃密な時間を過ごすことになり、「教員と学生の距離が極めて近い」という当学科独自の学習環境が形成されている。

### 1. 少人数教育

まず、学生が大学の授業に順応するために1年次の春学期に実施しているのが「基礎ゼミ」である。基礎ゼミでは、新聞記事や教科書を輪読して基礎的な知識を習得するとともに、議論を通じてコミュニケーション力を身に付けることを重視している。議論に積極的に参加することで、学生が主体的な学習態度を身に付けることは、大学教育において不可欠である。また、このような1年次における少

人数教育は、学習や交流を通じて人間関係を構築する絶好の機会にもなっている。輪読に加え、図書館を活用した新聞記事や論文、資料の検索方法について、パソコンを使って実際に操作を学ぶという実習も行っている。4年次に卒業論文を執筆する段階で、論文や記事検索は不可欠であるが、1年次で検索方法を習得させるために実践的な学習機会を設けている。

2年次秋学期には、3・4年次の本格的なゼミ活動の準備をするために「プロジェクトゼミ」を設けている。プロジェクトゼミは、教科書を輪読して3年次に各研究室で専門的に勉強する上で必要な知識の習得を目的としている。また、輪読に加え、各自が自身でテーマを設定して、データ分析や調査を実施するという調べ学習を行い、その結果についてプレゼンテーションを行っている。このような試みは、学生から高い評価を受けている。

3年次に入ると、ほとんどの学生は各研究室において本格的なゼミ学習（「リサーチゼミ・卒論ゼミ」）を開始する。3

年次のゼミでは、学生自らが報告や議論に参加することで深く考え、発言することが求められる。中でも特徴的なのが、3年次に実施される「フィールドワーク実習」である。各研究室の教員が設定した地域に数日滞在して、学生はテーマに従ってフィールド調査を行う。この実習では、調査方法を学び、対象地域の実情を知るとともに、データを収集し

分析する能力や文章を執筆する力を身に付けることを目的としている。なお、当学科ではゼミに所属する学生の学習を支援するために、各研究室の隣にパソコン等の情報機器を備えた部屋が設けられている。ゼミ所属の学生は、この部屋で自由に文章の執筆や分析作業をしたり、さまざまな交流を行ったりすることができる。フィールドワーク実習の

成果については、さまざまな方法で報告発表されている。例えば、中山間地域で調査を実施し、調査地域の行政や住民に



フィールドワーク実習の作業風景



ファームステイ実習の作業風景

キョウラムに基づき、担当教員と農場職員  
の指導のもと実施されている。食料環境  
政策学科では、通年で実習を実施してい  
るため、学生は「種まきから収穫まで」  
を体験することができる。

2年次のファームステイ実習は、実習  
科目の中でも、当学科の学生の学びの転  
換点になる。この実習は、農家に宿泊し

て農業に従事し、農家生活の実態に触  
れることで、現実の農業や農村生活の姿  
を学ぶことを目的として行われる。この  
実習には、学生たちが1週間（6泊7日）  
農家の人々と寝食を共にすることによっ  
て、農家の経営・家計・生活を総合的に  
把握し、加えて農村社会の実情に触れ、  
食料や農業・農村、環境や地域資源の問  
題を考えてほしいという学科の思いが込  
められている。

1週間、農家等に分宿して農作業の手  
伝いをする過程で、学生はさまざまな体  
験をしている。「美味しいご飯を頂いて  
太った」という学生もいれば、「いっぱい  
汗をかいて痩せた」という人もいる。ま  
た、終了後に実習地の農家を再訪する学  
生も散見される。このような人的つなが  
りは学生にとって何物にも代えがたい貴  
重な宝物である。ファームステイ実習で  
学生を引率し、実習期間中は実習地に滞  
在して現地対応を行っている教員にとっ  
ても、実習地で成長する学生の姿を見る  
のはこの上ない喜びである。

海外農業体験は、ファームステイ実習  
の海外版とも言えるもので、宿泊こそホ

テルであるが、中国の農場で早朝から夕  
方まで現地職員と一緒に農作業を行い、  
農場の社員食堂で3度の食事を取る。学  
生たちは片言の中国語と身振り手振り  
により、一生懸命現地職員との意思疎通を  
図っている。風土も経営規模も異なる海  
外の農場での一週間の農作業体験や現地  
職員との交流は、参加した学生に深い印  
象を与え、帰国後に外国語の学習に力を  
入れ、海外留学にチャレンジする学生も  
少なくない。

新型コロナウイルス感染症は、このよう  
な実習に大きな影響を与えた。2020  
年度および2021年度のファームステ  
イ実習と海外農業体験は中止を余儀なく  
され、フィールドワーク実習も従来のよ  
うな形態で実施することが困難となった。  
海外農業体験は未だ再開の目途が立って  
いないが、幸い2022年度のファーム  
ステイ実習に関しては、受け入れ先機関  
や農家等の協力を得てコロナ禍以前に近  
い形で再開することができた。関係者の  
協力を深く感謝するとともに、コロナ禍  
を機に、改めて当学科の少人数教育と実  
習教育の意義を再認識している。

※P48からの「ここに生きる」で、卒業生の活躍を紹介しています

## 2. 実習科目

先述した3年次のフィールドワーク実  
習以外にも、1年次に農場実習、2年次  
にファームステイ実習及び海外農業体験  
が実施されている。1年次の農場実習は、  
農学部全学科共通の基礎科目で、  
2012年度から生田キャンパスから近  
い黒川農場において、各学科独自のカリ  
キュラムに基づき、担当教員と農場職員  
の指導のもと実施されている。食料環境  
政策学科では、通年で実習を実施してい  
るため、学生は「種まきから収穫まで」  
を体験することができる。

4年次には教員の指導を受けながら、  
大学における学習の集大成としての卒業  
論文を執筆する。3年次の「フィールド  
ワーク実習」で習得した調査方法や分析  
方法を駆使して、自ら設定するテーマに  
即して、調査や分析を実施している。

以上のように、当学科では4年間を通  
して少人数教育を体系的なプログラムと  
して組んでおり、学生の積極的かつ主体  
的な参加を支援している。



フィールドワーク実習の一コマ